

文部科学省指定「※1 教育課程特例校」（令和7年度）

信州大学教育学部附属松本学校園は、平成28年度より令和5年度まで、文部科学省による※2 研究開発学校の指定を受け、『学びの総合化』を基軸として、幼小中一貫教育12年間の教育課程開発研究を進めてきました。その取組において、幼稚園で遊びに打ち込み育まれてきた学びの芽を、緩やかに統合し資質・能力を心身両面からバランスよく伸長できるようにするために、低学年では「学びの領域」を、高学年では、「領域の教科化」として「技術科」を設置しました。引き続き幼小中の接続を大切に、未来を拓く教育を推進するため、特別に認められた教科等を設置します。

※1 教育課程特例校…<https://curriculumdb.mext.go.jp/bc/tr/>

※2 研究開発学校…<https://curriculumdb.mext.go.jp/bc/kk/>

I 概要

【第1・2学年】子どもの思い・願い・問いを断ち切ることなく、複数の教科の内容を概観しながら緩やかに統合するため「ことば」「かがく」「くらし」「ひょうげん」の4つの領域を設置し、その子らしい対象との関わり方を通して、事象を多面的にとらえ、探究的な学習を行えるようにする。

【第4・5・6学年】技術によってよりよい生活や持続可能な社会を構築する資質・能力を育成する「技術科」を設置し、技術の見方・考え方を働かせ、ものづくりなどの技術に関する実践的・体験的な活動を行えるようにする。

2 特別な教育課程

(1)内容

- ①「ことば領域」：身の回りにおける言葉の意味・役割に関する見方・考え方を働かせ、事象に対し、主観的に価値づける言語活動を通して、情報や自分の考えなど、言葉との関係性を問い直したり意味づけたりすることで、国語科の内容を補完する。

- ②「かがく領域」：身の回りにおける自然科学に関する見方・考え方を働かせて、遊んだり作ったりする自然科学的な活動を通して、思考力を基盤とした、プログラミング的思考の素地を育成することで、算数科・生活科の内容を補完する。
- ③「くらし領域」：身近な人々、社会及び自然を自分との関わりでとらえ、比較、分類、関連付け、試行、予測、工夫することなどを通して、自分自身や自分の生活及び健康について考えることで、生活科・体育科の内容を補完する。
- ④「ひょうげん領域」：身体を通して感じることによる見方・考え方を働かせて、事象に対する主観的な価値づけに基づく表現活動を通して、感じたことや考えたことを伝えたり、対象について考えを深めたり、他者とつながったりすることで音楽科・図画工作科・体育科の内容を補完する。
- ⑤「技 術 科」：ものづくりや生産にかかわる体験活動を積極的に行い、探究的な見方・考え方を働かせ、横断的・総合的な学習を行うことを通して、第4学年の総合的な学習の時間の内容を補完する。

(2)教育課程表

学年		第1学年	第2学年	第3学年	第4学年	第5学年	第6学年
合計		867 (850) +17	927 (910) +17	980 (980) 0	1015 (1015) 0	1035 (1015) +20	1035 (1015) +20
各教科の授業時数	国語	(306) -306	(315) -315	245 (245) 0	245 (245) 0	175 (175) 0	175 (175) 0
	社会	-	-	70 (70) 0	90 (90) 0	100 (100) 0	105 (105) 0
	算数	(136) -136	(175) -175	175 (175) 0	175 (175) 0	175 (175) 0	175 (175) 0
	理科	-	-	90 (90) 0	105 (105) 0	105 (105) 0	105 (105) 0
	生活	(102) -102	(105) -105	-	-	-	-
	音楽	(68) -68	(70) -70	60 (60) 0	60 (60) 0	50 (50) 0	50 (50) 0
	図画工作	(68) -68	(70) -70	60 (60) 0	60 (60) 0	50 (50) 0	50 (50) 0
	家庭	-	-	-	-	60 (60) 0	55 (55) 0
	体育	(102) -102	(105) -105	105 (105) 0	105 (105) 0	90 (90) 0	90 (90) 0
	外国語	-	-	-	-	70 (70) 0	70 (70) 0
特別の教科である道徳 の授業時数		34 (34) 0	35 (35) 0	35 (35) 0	35 (35) 0	35 (35) 0	35 (35) 0
外国語活動の授業時数		-	-	35 (35) 0	35 (35) 0	-	-
総合的な学習の時間 の授業時数		-	-	70 (70) 0	50 (70) -20	70 (70) 0	70 (70) 0
特別活動の授業時数		34 (34) 0	35 (35) 0	35 (35) 0	35 (35) 0	35 (35) 0	35 (35) 0
ことば		323	332				
かがく		187	228				
くらし		102	104				
ひょうげん		187	193				
技術					20	20	20

令和7年度 教育課程特例校 自己評価と学校関係者評価

信州大学教育学部附属松本小学校

1 教育課程特例校としての取組

本特例は、幼小中の接続を大切に、未来を拓く教育を推進するため、幼稚園で遊びに打ち込み育まれてきた学びの芽を緩やかに統合し、学習の基盤となる資質・能力を心身両面からバランスよく伸長できるように、低学年では「遊びの領域化」（ことば・かがく・くらし・ひょうげん）を、高学年では、「領域の教科化」として「技術科」を設置し、幼小中一貫教育12年間で「たくましく心豊かな地球市民」としての資質・能力を育もうとするものである。

2 自己評価と学校関係者評価

自己評価	学校関係者評価
〈状況〉 1・2学年においては、「ことば」「かがく」「くらし」「ひょうげん」の4つの領域を設置し、その子らしい対象との関わり方を通して、事象を多面的にとらえる探究的な学習を各学級の中核活動を中心に行っている。4・5・6学年においては、技術によってよりよい生活や持続可能な社会を構築する資質・能力を育成する「技術科」を設置し、技術の見方・考え方を働かせ、ものづくりなどの技術に関する実践的・体験的な活動を行っている。年間2回行っている学級懇談会において、保護者に児童の探究する姿を通して説明している。 〈成果〉 【遊びの領域化】児童は、教科の垣根にとらわれることなく、自分の『思いや願い、問い』に向かって、夢中になって追究することができている。教師も子どもの『思いや願い、問い』をもとに、その子なりの特長をより発揮しながら教科の本質に迫る姿を捉え、支えることができている。 【領域の教科化】「技術科」では、自然とものづくりに親しんできた子どもたちの「つくりたい」という思いや願いを生かした学習活動が展開できている。また、技術科では「誰のために」、「どんなニーズがあるのか」という「相手意識」を徐々に広げながらものづくりに打ち込むことで、中学校の技術科の見方・考え方につながる素地を育む実践につながっている。 〈課題と方策〉 教科の枠を柔軟に捉えた【領域】の授業では、各学級の中核活動と関連付けて児童の探究意欲を高めることができる反面、【領域】の授業における教科的な評価基準や育成する資質・能力が曖昧になってしまいがちである。今後、1・2学年の【領域】の学習であっても教員自身が各教科で育成する資質・能力（「知識・技能」「思考・判断・表現」「主体的に学習に取り組む態度」）を意識して単元計画を作成するよう研究を進めていく。そうすることで、本校の教育課程表に示された授業時数管理の意識を高め、児童にとってより本時のねらいがわかりやすい授業の展開につなげていきたい。	保護者へのアンケートの結果では、 【自己表現力】【課題探究力】【社会参画力】が児童に育ってきているか」「幼小中一貫した教育目標、カリキュラムづくりを進めていることをわかりやすく伝えているか」「子どもの思いや願いを大切にし、そこから探究的な学びが生まれるよう指導方法を工夫して授業をしているか」についての質問項目は、どの項目も肯定的な回答が7割～9割を占め、研究開発学校指定研究で取り組んできたことの内容や児童の姿にあらわれる資質・能力等を保護者が受けとめることができていると判断される。 児童アンケートでは「授業がわかりやすいと感じたり、楽しく授業に取り組んだりしている」という授業評価に関する質問項目は、肯定的な回答が8割程度となった。 学校評議員からは、「教育の特色を出しながらの学校運営で保護者から効率や成果を求められる中で、先生方は大変素晴らしい学習指導をしている」「子供たちの目を見ていると全学年楽しみながら学習していることが伝わる」「子供たちの考え方・発想はこの学習環境で素晴らしく成長しているので、将来を社会情勢を踏まえ＋αの学習を期待している」とのご意見をいただいた。

令和7年度 学校評価全体集計結果 報告書

1 実施期間

令和7年11月～12月

2 実施対象

児童：422名（有効回答：327名）

保護者：338名（有効回答：237名）

アンケート結果（100%積み上げ棒グラフ形式）

■ よくあてはまる ■ ややあてはまる ■ あまりあてはまらない ■ あてはまらない ■ わからない

(1) 児童アンケート

質問3：私は、授業がわかりやすいと感じたり、楽しく授業に取り組んだりしている。（327件の回答）



(2) 保護者アンケート

質問1：子どもは、観て、聴いて、感じたことを自分らしく表現する力が育ってきている。（237件の回答）



質問2：子どもは、自分らしい問いや願いを持ち、物事に粘り強く働きかけたり、問いを解決したり願いを実現したりしようとする力が育ってきている。（237件の回答）



質問3：子どもは、多様な価値観（考え）を持つ他者と、共通の目的のために、一緒に活動しようとする力が育ってきている。（237件の回答）



質問4：学校は、幼小中を一貫した教育目標、カリキュラムづくりを進めていることをわかりやすく伝えている。（237件の回答）



質問5：学校は、未来を拓く「地球市民」を育むために、子どもの思いや願いを大切にし、そこから探究的な学びが生まれるよう指導方法を工夫して授業をするようにしている。（237件の回答）



【考察】

児童アンケートの「授業がわかりやすいと感じたり、楽しく授業に取り組んだりしている」の質問項目については、肯定

的な回答が例年並8割程度となったが、「よくあてはまる」「ややあてはまる」の割合は昨年度より減少した。各公開研究授業の際には、外部講師より各児童の主体的な取組や思考・判断力の高まりなどを評価いただいている。一方で、児童の意識からは、自身の取組のよさが十分感じられていないことが伺える。各領域・教科の授業では学習内容を振り返る時間を重視し、児童自らが「思いや願い、問い」を基に学んでいるよさを実感できるようにし、これからの学習に向けて自己の取組を調整する力の育成を目指すなど、引き続き指導のあり方について教員全員で研修を重ねて見直していきたい。

保護者アンケートは、どの項目も肯定的な回答が8割～9割を占め、研究開発学校指定以降の取組や児童の姿にあらわれる資質・能力等を保護者も受けとめることができていると判断される。一方で、R7年度は幼小中一貫教育校としてスタートしたが、その内容の周知や理解には積み重ねが必要と考える。効果的な発信について検討していく。

学校評議員からのご意見（抜粋）

- ・教育の特色を出しながらの学校運営で保護者から効率や成果を求められる中で、先生方は大変素晴らしい学習指導をしていると思います。ただ、教頭先生の元で全体を見渡す役割の方は必要なのではないかと強く思います。
- ・全国学力・学習状況調査で、県内の公立や全国平均より数値が高い結果となったことは素晴らしいと思います。ただ、国立の中では平均を下回り、当校も中学から受験して入学してくる生徒が入ってくることを見据えるとさらに6年生はさらに学力の向上を目指していく必要性はあるかと思います。そこを附属の特色と併せて伸ばしていけるとさらに学校の価値が向上します。
- ・子供たちの目を見ていると全学年楽しみながら学習していることが伝わります。将来公立ではなく本校がさらに選ばれる学校になるためには、現在の「領域」の学習に加え、「英語」「算数」に特化した要素も必要になるのではないかと思います。子供たちの考え方・発想はこの学習環境で素晴らしく成長しているので、将来を社会情勢を踏まえ α の学習を期待しています。
- ・学習進捗の問題がありましたが、進捗指標については義務ではないものの世の中の保護者の要望がある以上は、今後も丁寧に管理していくべきだと思います。これまで以上に公立学校との差別化を意識した取り組みをし、淘汰の渦に巻き込まれるリスクを意識した将来設計をしていただきたいと思います。附属の教育は素晴らしくあくまで将来的存続を危惧しての発言です。